

E S R I - 経済政策フォーラム

日本21世紀ビジョンシリーズ

「若者は夢を失ったのか - 現代社会の若者像」

平成16年12月24日

経済社会総合研究所

E S R I - 経済政策フォーラム
日本21世紀ビジョンシリーズ
「若者は夢を失ったのか-現代社会の若者像」
議事録

経済社会総合研究所
E S R I - 経済政策フォーラム 日本21世紀ビジョンシリーズ
「若者は夢を失ったのか-現代社会の若者像」議事次第

日時： 平成16年12月24日(金) 10:00 - 12:30

会場： 赤坂アークアカデミーヒルズ36階 アカデミーホール

1. 開 会

2. 基調講演：

宮台 真司 東京都立大学人文学部助教授

斎藤 環 医療法人爽風会佐々木病院診療部長 (精神科医)

3. パネルディスカッション

(パネリスト) [50音順]

小倉千加子 評論家

小杉 礼子 独立行政法人労働政策研究・研修機構副統括研究員

[日本21世紀ビジョン生活・地域ワーキング・グループ委員]

斎藤 環 医療法人爽風会佐々木病院診療部長 (精神科医)

宮崎 哲弥 評論家

[日本21世紀ビジョン生活・地域ワーキング・グループ副主査]

宮台 真司 東京都立大学人文学部助教授

(モデレータ)

中藤 泉 内閣府大臣官房政策評価審議官

(前内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官)

4. 会場との質疑応答

本議事録は、フォーラム事務局の責任において作成したものであり、ありうべき誤りはフォーラム出席者に属するものではない。

司会 ただいまから E S R I 経済政策フォーラム日本21世紀ビジョンシリーズ「若者は夢を失ったのか 現代社会の若者像」を始めさせていただきます。

パネリストの方々のご紹介をさせていただきます。

皆様の向かって左側から、評論家の小倉千加子様でいらっしゃいます。(拍手)

独立行政法人労働政策研究・研修機構副統括研究員で日本21世紀ビジョン生活・地域ワーキング・グループ委員の、小杉礼子様でいらっしゃいます。(拍手)

医療法人爽風会佐々木病院診療部長で精神科医の、斎藤 環様でいらっしゃいます。(拍手)

評論家で日本21世紀ビジョン生活・地域ワーキング・グループ副主査の、宮崎哲弥様でいらっしゃいます。(拍手)

東京都立大学人文学部助教授の、宮台真司様でいらっしゃいます。(拍手)

モデレータは、中藤泉内閣府大臣官房政策評価審議官が務めさせていただきます。(拍手)

それでは中藤審議官、よろしく申し上げます。

モデレータ(中藤泉内閣府大臣官房政策評価審議官) 年末のお忙しいときにお越しいただきまして、ありがとうございます。

ただいまから E S R I フォーラムを開催させていただきます。

本日の進行でございますが、初めに宮台さんから基調講演をいただき、その後、斎藤さんからさらに基調講演をいただくという形で進めさせていただきます。

その後、小杉さん、小倉さん、宮崎さんからプレゼンを受けての冒頭のご発言があります。それに対しまして宮台さん、斎藤さんに1回リジョインダーで返して、その後、フリーディスカッションという形で進めさせていただきます。

また、本日たくさんお見えになっておりますので、会場からのご意見、ご質問を受けるような形で全体を進めていきたいと思っております。

それでは、まず初めに宮台さんから、冒頭のプレゼンテーションをお願いします。

宮台真司(東京都立大学人文学部助教授) おはようございます。はじめまして。宮台真司と申します。

最初にイントロダクションをして、その後、現状、背景、処方箋という3段構えでお話ししていきたいと思えます。

今日の話は、若い人たちのあり方を、まず適応現象 アダプテーションとして、つまり環境に対するある種の適合として理解した後、それを「問題だ」と指摘するためには一定の価値観が必要であることをご指摘し、その処方箋の方向性をどのように出せばいいかお話しさせていただきたいと思えます。

時間がないので、残念ながら通り一遍のお話になるかもしれませんが、不足している情報については、私のホームページなどを見ていただければ、ある程度補っていただけるのではないかと思います。

まず、若い人の現状を実存的 イグゼシテンシャルな部分と、関係的というか、リレーショナルあるいはリレーションシップ的な部分に分けて考えますと、前者において目立っているのは、基本的には乖離化という方向性と鬱化という方向性であると思います。加えて、関係性的な方向で問題になっているのは、他者に対するノイズ耐性、免疫が下がっているということ。そしてもう一つは、現象的な意味で、他者不在でも欠落感を感じないというタイプのあり方が目立ってきているということですね。以上の4点を、まず現状としてお話ししたいと思います。

精神科医の斎藤環さんがいらっしゃるの、後で補足していただけるかもしれませんが、乖離は、もともとは乖離性同一性障害、さらにもともとは多重人格と言われていたもので、厳密に言えば、記憶の断絶を要件とする、ある種のインテグレートされていない人格の存在のことを言うわけですが、「乖離的」という言葉、これは斎藤さん自身もお使いになっていらっしゃるけれども、そういう言葉が広がっていることからわかるように、乖離あるいは多重人格的なあり方が非常に広がってきている。

別に「スーパーフリー」のような、ああいう逸脱行動を犯す人間たちの発言をとるまでもなく、例えば企業の就職活動マニュアルや企業研修のあり方など一般が「乖離の勧め」という形をとるようになってきているわけですね。わかりやすく言えば、自分は何をしたい人間であるのか、あるいは自分は何者であるのかを人の前で明かし、プレゼンテーションすることが昔は要求されていたとするならば、今は複数のモデルの引き出しを用意しておくわけですね。こういう場面ではブルース・ウィルスになる、この場面ではショーン・ペンになる、こういう場面ではブラッド・ピットになるといった形で状況ごとにモデルとする人格を別々にしておいて、相手の要求に応じて要求される人格を提供するといったプレゼンテーションを要求されるようになってきているわけです。就職活動マニュアルも、それに引っ張られて変化しています。

ちなみに、僕のゼミには日本で数少ない企業研修のプログラムをつくる人間がいますので、その内容について私は詳しく知ることができるわけです。

もう一つ、鬱について言いますと、これも斎藤環先生に後で補足していただけるかもしれませんが、今、広がっているのは軽症鬱病と呼ばれているような、古典的な鬱とは少し違う、つまり、自罰的な傾向だけではなくて他罰的な傾向がそれに入り込んできて相互後退するようなタイプの鬱です。わかりやすく言うと、古典的な鬱は、自己関係化の病だと考えられます。つまり、自分が望ましい自分ではない、あるべき自分ではない、あるべき自分と現実の自分との間に大きな乖離が広が

っているという感覚がある。軽症鬱病も、それはある意味、そういうふうにも言えるんですが、しかし、昔と違って、例えば仕事もできる、社交性も悪くない、もてる、あるいはナンパ師をやっているとか、そういう昔だったら鬱とは最も遠いように見える人間たちが、都度都度鬱的な状態に陥るという点に特徴があるわけです。

ノイズ耐性については、言わずもがなですけれども、皆さんのわかりやすい範囲で言えば、満員電車の雰囲気、ここ十数年変わってきていると思われる方が多いはず。これは動物行動学的な問題だと言うこともできますが、つまり、他者が物理的な距離においてどこまで近づいてくると異物感を感じるかということなんですね。これは生き立ちによって培われてくる行為態度でありますので、実は社会環境の関数であるわけですが、こういう他者と場を共有することが次第に不可能になり、ストレスフルになってくる状況があるわけです。

時間がありませんので、4番目のファクターについてはスキップさせていただいて、先に進みます。

次に、この背景を考えるわけですが、こうした変化の背景にある社会変化、これを持ち出すことによって、これがどういう適応現象であるのか理解することができるわけでありませう。

結論から最初に申しますと、社会の流動性が増大する。流動性というのは出入りのことですが、流動性が増大することに対する適応現象として、この乖離化と鬱化を理解することができるということです。

例えば、物理的な情報処理量のことを考えていただくとわかるんですが、高度な情報処理が要求されているときには、機能的な側面ごとに情報処理のエージェントをディファレンシオン分化した上で、それを統合せずに放置する、緩く共存させるというやり方が最も効率がいいわけ。逆に、インテグレートされた1個の主体によって情報処理を一貫させようとする、非常に負荷がかかるわけ。したがって、場面ごとに異なる人格が存在するかのように行動し得ることは、情報処理のコスト減という観点から見て非常に合理的であるわけ。

同じく、人間関係や社会関係の流動性が高まってまいりますと、当たり前のことですが、入れかえ可能性、自分でなくても務まる、同じ能力があれば自分でなくても仕事ができるとか、同じようにかわいかったり、同じように高学歴であったりすれば自分でなくても相手のパートナーが務まるといった入れかえ可能性の感覚がどんどん高まっていくわけ。

この流動性に伴う入れかえ可能性の上昇が、例えばコミュニケーションに実りがないという感覚や、自分がそこにいる必要がないという感覚を上昇させることとなります。そうすると、やはり軽症鬱病化ということも、ある種の流動性に対する適応現象であると言えるわけでございます。

あとの2点、他者に対する免疫の話と、現象的に他者を必要としないで充足できるというような感覚については、また後で時間があったら振りかえるといたしまして、処方箋に当たるお話をさせていただきます。

適応現象そのものは学問的には中立的で、「生き残るためには適応した方がよい」といった言い方ができるのみであります。しかし、この乖離においても軽症鬱病化においても、これが社会的に問題であると認識されているのはなぜでありましょうか。

結論は、簡単ですね。わかりやすく言えば「うまく生きること」と「まともに生きること」の乖離が皆さんに意識されているということです。うまく生きようと思うと、まともな人間であることが難しくなるという、ある種の、それこそ乖離が意識されつつあるということですね。例えば、企業的な合理性においては、多重人格的に場面で人格を使い分けてもらうのが最も合理的な振る舞いでありますけれども、しかし、我々は生活世界において人と対峙するときには、一体その人が何者であるのかを自ら伝承し得るような一貫した存在、つまり、人格を要求するわけです。したがって、例えば企業的な合理性を生かすような行動、あるいは行為態度が、我々が「これはまともな人間である」と評価する場合の行為態度と合致するとは限らないということをとってみれば、問題の所在がわかるであろうと思います。

加えて、今、生活世界という話を持ち出しましたが、これについて補足いたしましょう。

基本的には、私はよく「皆さんは、どういう社会がいい社会だと思うのか」と言うんですね。価値観に応じて、実は流動性の高い社会や、今のような、まともに生きることとうまく生きることの乖離が広がる社会の評価が変わってまいります。

それをわかりやすく提示するために、地元商店的アメニティ　アメニティは快適さという意味ですね。それとデニーズ的アメニティ、コンビニ・ファミレス的アメニティというふうな対立を皆さんの頭の中に置いていただきたいんですね。デニーズ的なアメニティの特徴は、ルールとマニュアル、つまり役割とマニュアルに支配されていることです。マニュアルに従って役割を踏み行うことができれば、誰でもいいわけです。したがって、デニーズ的アメニティにおいては人は入れかえ可能で、固有名は重要ではありません。したがって、国際標準のホスピタリティがあり得て、「ようこそデニーズへ」というのが世界中どこでも通用する。あるいはマクドナルドでも同じようなことが世界中どこでも通用する、そういう形になっているわけですね。これ自身も流動性の増大そのものです。

ところが、地元商店的アメニティは、これとは違いますよね。皆さんが商店に行くと、店主やほかのお客との間で立ち話が生ずる。「この間まけてくれたんだから、またまけてよ」そこでは固有名詞、記憶が重要です。固有名詞や記憶を支えるだけの流動性のなさ、非流動性があるわけですね。

すなわち、役割とマニュアルが変わって、そこでは善意と自発性が機能し得るようになってきているわけです。

我々社会学者が「近代成熟期が訪れた」あるいは「後期近代になった」と言う場合に、何を意味しているのかということですね。経済学的に言えば、あるいは経済指標的に言えば第3次産業の増大をもって近代成熟期に入ったと言うわけですが、これは単なる産業構造や労働人口構成の問題ではないわけですね。例えば、第3次産業の市場化が広がっていくというのはどういうことかと言えば、従来は家とか地域社会といったような生活世界　これは後で定義しますが、生活世界における自立的な相互扶助が賄っていた便益を、市場化、行政化するということですね。生活世界で賄っていた便益をシステム化していくという動き、これが後期近代化であります。

まさにデニーズ的なもの、ファミレス的なもの、コンビニ的なものというのは、そうしたものであるわけです。したがって、近代成熟期が訪れた70年代以降、とりわけアメリカと日本におきましては、アメリカはまた特殊な事情があるんですが、それは置くとして、このデニーズ的なものが地元商店的なものを席卷していくという動きが、ほとんど歯どめがかからないまま進行してきたわけです。

さて、そこでお考えいただきたいんですけども、例えば日本においては、これは今から十四、五年前の大規模店舗規制法緩和に象徴されるような、ある種の国民的な合意事項が一体どういう社会を支持しているのか、どういう社会のビジョンをサポートしているのか、皆さんに反省していただきたいわけですね。

と申しますのは、ここで冒頭の話につながるわけですが、流動性が高く、役割とマニュアルさえ踏み行っていれば誰でもいいような入れかえ可能な社会であれば、当然のことながらノイズ耐性は低くなります。だって、それは相手の人格がどうたらこうたらという問題ではなくて、誰だかわからない匿名性の下でシステムが動くわけですから、ノイジーなファクターはできるだけ除去されなければならない。したがって、もしデニーズ的アメニティをよしとするのであるならば、少年犯罪や、あるいはそれを含めた刑法犯における重罰化や隔離政策は肯定されなければならないし、監視カメラに基づくような社会の技術的なセキュリティ化、これも容認されなければならないことになります。

これに対して、もし善意と自発性に基づく社会を何としても護持しようとするのであれば、そこでは固有名が重要となり、人格が重要となり、である以上、ノイズ耐性が高くなるわけです。

マイケル・ムーアの「ボウリング・フォー・コロンバイン」におけるカナダ・モントリオールでのインタビューではありませんが、泥棒があることなんて、別に大したことではないわけです。

「あなたたち鍵かけないのか」「鍵かけないよ」7割が鍵をかけない。「泥棒入るだろう」「入る

よ」「困るじゃないか」「いや、大事なものを置いておかなきゃいいのさ」つまり、逸脱が社会的にどれだけ問題であるのかということは、それをどのように受けとめるのかという社会的な懐の深さ、あるいは受けとめる側の行為態度の問題でもあるわけなんですね。

したがって、さっき重罰化の話为例として少し出しましたけれども、ルールとマニュアルに基づく社会が異物に対して過敏で、善意と自発性に基づく社会が異物に対しては寛容で、なおかつ「コミュニケーションに実りが無い」と感じがちなのがデニズ的なアメニティの場合、「コミュニケーションに実りがある」と感じられるのが生活世界あるいは地元商店的なものである。

さらに、例えば逸脱をした人間の社会的な更生という場合においてすら、実りのあるコミュニケーションにおいて、懐の深いコミュニケーションを提供できるのはどちらなのか考えてみますと、犯罪者のリスペクト、リエントリー、多くを容認すべきだという主張は、どういう社会観と一体でなければならないのかおわかりいただけと思うんですね。

決論的に申しますと、高い流動性を容認するのであるならば、それに適応する乖離的な行為態度は、これを是とせねばなりません。さらに、このような流動性の高いコミュニケーションにおける入れかえ可能性ゆえに、社会、コミュニケーションにかかわることそれ自体を実りのないものだと思って対峙する人間が出てくる、これも是とせねばなりません。

ちなみに、我々の近代社会は、フーコーからドゥルーズへの社会観の変化に象徴されるような大きな変化がありました。昔、近代社会は、フーコーならば主体化と言いますが、罰を与えなくても、皆さんが主体的、自発的に行動するだけで皆さんの振る舞いが一定のフォーマットにおさまるような、そういう規律訓練を課してきたわけです。ところが、社会が複雑になりますと、そのような規律訓練にコストがかかるようになるわけです。したがって、ちゃんとした人間として主体化されていなくても、そこにいるのが人間ではなく犬や猫であっても社会が回るように、つまり、人々の振る舞いが一定のフォーマットにおさまるように、さまざまな情報管理テクノロジーを配置する。比喩的に言えば、規律訓練に基づく主体化に代わって電気ショックネットワークによって、そこにいるのが動物であっても社会が回るように構成していくのが社会工学 ソーシャルエンジニアリング上の重要な変化であるわけです。

そういう変化がどんどん及んできているというのも、実は流動性が増大している以上、そこに犬がいるのか猫がいるのか人がいるのかわからないからなんですね。

したがって、もし皆様がこのような高い流動性に基づく情報管理テクノロジー的な社会を是とするのであるならば、若い人の乖離現象も、軽症鬱病化も、あるいは他者に対するノイズ耐性の低下も、あるいは他者が存在せずとも持続し得るような行為態度も、すべて容認されなければ一貫しません。

現象的には、他者に対するノイズ耐性の低下は80年代におけるさまざまなレベルでの個室化現象が引き起こしたということは、ある程度、傍証できる場所でもあります。今日はその細かいところは、ご質問があれば細かにデータをお示ししてお話ししますが、いずれにしても、今日スキップしたあとの2点につきましても、社会の流動性の高まりと非常に密接な関係があります。

結論です。

若い人たちの最近のあり方が「問題である」と皆さんがおっしゃるのであるならば、皆さんは、一定の社会観あるいはグランドデザイン、ビッグピクチャーを支持しなければだめです。流動性の高い社会を支持しながら、例えば社会的な更生を要求したり、若い人たちに一貫した人格を要求したり、社会に実りがあるんだから社会に戻れと要求したりするのは全く矛盾した振る舞いなので、実際には、若い人たちから全く相手にされないであります。

以上です。（拍手）

モデレータ どうもありがとうございました。

続きまして、斎藤さんからプレゼンテーションをお願いいたします。

斎藤環（医療法人爽風会佐々木病院診療部長）[資料参照]

今日は私、精神科医として、若者の自殺、引きこもり、特に非社会傾向についてお話しさせていただくという役割なのですが、今、宮台先生がお話しされた内容とかなり重なる部分がありますので、そういった部分にもコメントしつつ話を進めさせていただきたいと思っています。

こういった若者論というのは、成熟論とか適応論と密接に結びついた形で展開することが多いわけですが、その中では、成熟や適応が自明のごとく価値の高いものということが前提とされます。しかし、今日は、そういったものを自明の前提としないところからお話しさせていただきたいと思っています。

私の考えの基本にあるのは、例えば若者集団があるとして、そのすべての若者が非常に好ましい適応レベルに至るということは、多分あり得ない事態でありまして、一定の集団でいろいろな属性をとると、統計で言う正規分布というカーブを描くわけですけれども、その正規分布の両端は、天才的に適応がいい人と、いわゆるドロップアウトする人が出てきます。突出した才能を求めるとすれば、このドロップアウトも付随するものとして必然的に受け入れなければならないというのが、私の基本的な考え方でありまして、すべての若者が等しく適応できる状況自体がかなり難しい、ナンセンスな事態ではないかと考えるわけです。

ですから、今日、問題にするのは、とりあえず不適応の形態としてどういうものがあるかということ、まずお話しさせていただきます。そして、その不適応の形態が問題なのかどうかも当然あるんですけれども、その不適応形態について、ほかにどのような形が考えられるのか、あるいは不

適応形態が必要以上に大きな波及効果を及ぼすことを防ぐためには、どのような手段が考えられるか、そういった段階を追ってお話しさせていただきたいと思っています。

日本における若者論というのは、基本的に非社会傾向に主たる焦点が当てられてきた経緯がありまして、非社会性の系譜みたいなものがあると言っていいと思います。これは1950年代から始まった、いわゆる登校拒否、不登校、学校恐怖症の議論に始まりまして、70年代においては、いわゆる「三無主義」という言葉がはやりましたし、それから「スチューデント・アパシー」という今は余り使われなくなった言葉が、この当時アメリカから輸入されて、普及いたしました。

80年代初頭には「おたく」という言葉が発明されまして、どのような統計をとったかわかりませんが、現在約280万人のおたくが日本にいるそうです。それから、80年代後半に「フリーター」という言葉が「リクルート」という雑誌でつくられまして、これが今現在400万人。

そして、90年代に入る手前で「引きこもり」という言葉が出てくるわけです。これも言ってみれば輸入概念でありまして、Social Withdrawalという言葉を目録して「社会的引きこもり」。ほかの病状がないにもかかわらず、純粋に引きこもりだけを呈する若者が日本にはたくさんいるというところから「引きこもり」という言葉を突出して用いた結果として、この「引きこもり」という言葉が大変有名になったということで、現在41万世帯。イコール41万人ではないことにご注意ください。

それから、90年代に入りまして「パラサイトシングル」1,000万人。

それから最近、特に今年ブレイクした言葉としては「ニート」というのがございます。これは後で小杉さんの方からお話があると思いますが、引きこもりと大変似ているのは、言ってみれば、一種和製英語的な位置づけになりつつあるところでありまして、イギリスの本来の定義からかなり修正を加えて日本版として適用しているというところは、まさに「引きこもり」のケースと似ていますし、それから、こういった非社会傾向が有名になるに際しては、決まって何かしら犯罪・事件との関連で有名になる経緯も共通していると言っていいと思います。

ご存じのとおり、「おたく」は宮崎勤事件で一気に有名になりましたし、引きこもりに関しては、新潟県柏崎市の少女監禁という大変有名な事件がありました。そして最近、東大阪とか茨城で続発した両親殺しの事件は、全く事実と違うと私は思うんですけども、「ニートの犯罪」とメディアが軽薄にも報道してしまいましたので、これも事件絡みで有名になったと言っていいのではないかと思います。

私の専門は社会的引きこもりですので、その定義からお話しさせていただきたいと思いますが、これは6カ月間以上社会参加をしない状態で、精神障害を第1の原因としない。ただし、ここで言う「社会参加」というのは、つまり社会とは何かという問題に絡んでくるんですけども、あくま

でも臨床的便宜におきましては、家族以外の対人関係を持つことが社会参加の第一歩と考えられております。要するに、家族との関係がよくても社会参加とは見なされないということでありまして、ほかに、もちろん就学、就労している場合も社会参加していると見なされるわけですが、ニートとの一番の違い、つまり昔、厚生労働省が「社会的引きこもり」を定義した時点では、「就学、就労していない若者」というだけであつたんですけれども、それだと今のニートと全く同じになってしまいますので、それにつけ加えまして、私が98年に提唱した対人関係の有無を取り入れていただいて、親密な家族以外の対人関係があるか否か、これがニートとの分かれ目とご了解いただければいいと思います。

ほかに、ニートには今のところ「35歳まで」という年齢制限がありますので、36歳以上のニートは引きこもりということになるわけですが、この辺は、後で小杉さんから何かコメントがいただけるかもしれません。

今のところ、引きこもりはニートに含まれる。対人関係がたまたまある人はニート、ない人は社会的引きこもりという大ざっぱな区分でよろしいかと思いますが、どちらも非社会的な傾向として、一応鍵括弧付の問題視されていることは間違いのないところだと思います。

もう一つつけ加えますと、小杉さんや玄田さんがどれほどそれを意図したかわかりませんが、実は私は、25歳以上のニートというのは、ほぼ引きこもりと重なってしまうのではないかと考えておりまして、そういった意味では、いささか飽きられつつあつた引きこもり概念をリニューアルするという意味も随分あつたのではないかと私は考えております。

社会的引きこもりの特徴を少しつけ加えておきますと、まず、不登校との関連性が結構高いということは述べておかなければならないと思います。不登校の長期化する群というのは、大体15%から20%あると言われていまして、それが引きこもりもしくはニート化していく。もちろん不登校以外のルートから流入してくる分もあるわけですが、大体70年代後半から増加しつつあると言えらると思います。ちなみに、この70年代後半というのは、日本における若者の思春期、青年期のあり方がかなり大幅に変化を遂げた、ターニングポイントとなつた年ではないかと考えています。

男性に多いのも一つの特徴でありまして、これは後で触れる機会があるかもしれません。それから、どのような家庭のどのような子供にも起こるといふところが、まさに若者論に対する引きこもりの有効性でありまして、不登校と全く一緒ですね。これは、たまたま引きこもってしまった人は延々と引きこもり続けてしまうといったような、一種引きこもりスパイラル的な構造があるのではないかと思ひます。結果的に著しい長期化に陥ってしまうことが言われていまして、大体、数年以上たつてしまった者に関しては、もうそのまま10年、20年たつてしまう可能性が言われております。

これはおわかりのとおり、年齢がたてばたつほど就労が困難になっていく、社会参加の回路が失われていく。つい先ごろ東大阪市でありました36歳男性の両親殺害という事件、これは殺害というよりも心中未遂と言うべきものですが、36歳というのが非常に象徴的でありまして、要するに、雇用の募集年齢の一般的上限が35歳であることを考えますと、そこを過ぎるとますます絶望が深まっていく、そこで自暴自棄になって暴発を起こすということが、これからちらほら起こってくる可能性がある。

さらに20年、30年たってくると、言ってみれば引きこもり高齢化社会みたいなものが生まれてくる可能性があります。つまり、思春期以降、一度も社会参加をしたことがない老人が数万人単位で出現し始める。このとき新たな問題領域として生じてくるかもしれないのは、彼らの年金の財源ですよね。つまり、一度も納税をしたことがない老人に対して税金を財源とする年金を支払うべきかどうか、そういう問題が、そこで出てくるかもしれないということです。

そういった予測に基づいて、次にいきたいと思います。

これは日本固有の問題かということなのですが、確かに、日本に突出して多いことはよく言われますし、今のところ海外の取材に応じた経験等を通じて、ある程度は言えると思います。差し当たって言えることは、日本と韓国に突出して多いということです。韓国にも大変増加中で、向こうの精神科医に言わせると、今、韓国に300万人引きこもりがいると。幾ら何でもそれは多過ぎるだろうと私は思いますが。何しろ人口が4,000万人の国で300万人も引きこもっていたらえらいことですからね。

実情は違いますが、たしかに急増中であることは間違いないようで、私は、これは広く括った場合の、ごく浅い意味での儒教文化圏の問題として考えることができるのかもしれないと思っています。ごく簡単に言いますと、自立をどう考えるかという問題でありまして、成熟した若者が家から出て自立と見なされるか、あるいは一人前になって、同居しつつ親孝行して自立と見なされるか。つまり、儒教文化というのは親孝行社会ということで、さらに延長して考えると同居型文化ですから、家から出ることがさほど成熟の基準にならないということで、同居した状態が延々と続いてしまう。そういうことから派生してくる可能性も高いのではないかと考えるわけです。

今、若者の未成熟の問題が取りざたされる場合に、私が軸として2つ考えた方がいいと思うのは、ここに書きました「引きこもり系」と「自分探し系」という軸であります。

先ほど宮台先生が解離と鬱のことをおっしゃっていましたが、これを対応関係で言いますと、引きこもり系の方が鬱に該当すると言っていいと思いますし、自分探し系の方、つまり流動性が高くコミユニカティブな若者の方が解離につながるという共通点はあると言っていいと思います。つまり、その辺で、現状認識はかなり共通していると言っていいのではないかと思います。

引きこもり系に関しましては、先ほど触れましたように、かなり特異な、文化結合症候群という概念が精神学にありますけれども、そこまでは言いませんけれども、社会文化的背景をしょった問題であろうかというところが指摘できると思います。

つまり、先ほど正規分布の例を出しましたけれども、そのドロップアウトしていく若者の一つの形態として、欧米では、例えばヤングホームレスの人口が数十万以上ということで大変問題になっていますけれども、日本では、まだまだそれほど多くはない。つまり、社会の外側にドロップアウトしていくか、やはり社会の外側にはあるけれども家の中にドロップアウトしていくか、その違いと言ってもいいのかもしれないということで、このヤングホームレスの人口に、引きこもり人口というのは該当するのかもしれないと考えているわけです。

彼らは基本的にコミュニケーションは苦手という意識が大変強くて、自己イメージは比較的、ネガティブなものも含めて安定していることが多いんですけれども、非常にコミュニカティブではない。ですから、よく誤解されていますようなインターネットもさほど使いませんし、もちろん携帯も持っていませんし、そういったコミュニカティブな回路から自分を隔絶する形で過ごしていることが大変多い。これが適応的な方向に向かうと、すごく創造性を発揮して、何か物を創り出したり小説を書いたり、ゲームをつくったりという方向で、おたく系なものですからね、発揮されることがあるんですけれども、不適応形態としては、社会的引きこもり、ニート、それから最近、取りざたされる家庭内暴力の問題、こういったものに結びつきやすいと言えます。

ですから、事例としては、最近続発した心中未遂としての親殺し事件　私はすべて本質は心中未遂と考えています。それは、どの事件も自分から通報していることから、ある程度それは言えるのではないかと思います。

もう一つ、自分探し系の問題にいけますけれども、これは、ほぼ先進諸国に共通して起こっている成熟困難の問題と言っていいと思います。つまり、コミュニカティブで流動的なんですけれども、その度が過ぎてしまって、解離の問題とか、すごく不安定な人格であるとか、衝動性であるとか、そういったものが温存されてしまう。つまり、これは先ほど宮台先生がおっしゃったように、一つの過剰適応のパターンとして、精神医学的には不適応問題として析出してくる部分があると言っていいと思うわけです。

これに該当するのは、解離の問題のほかにリストカットとか、ネット心中とか、それからカルトに走る若者というのも、この過度にコミュニカティブな方の若者であります。引きこもり系の若者は、カルトの方に行くことはほとんどない。これは当然、彼らのプライドが著しく高いこととも関連するんですけれども、自分探し系のコミュニカティブな若者は、流動的である分だけ自己イメージが拡散しがちで、その分、プライドへのしがみつきも低いところがありますから、その過度の流

動性が不適應を起こした場合には、そちらの方に言ってしまう可能性があるということです。

全般として、思春期、青年期というのは、こういう二極に分化する方向で変容しつつあると言っていていいと思います。これを大きくとらえますと、いわゆるアイデンティティの拡散の問題であるとか、あるいは就労困難な問題から、最近言われるようになった社会的弱者化する若者という問題であるとか、それから、若者全体に薄く広がりつつある幻滅感であるとか絶望感であるとか、それから先ほど触れましたように、反社会性よりは非社会的な傾向であるとか、そういったものが指摘できるであろうと思います。

ここに述べたことは、いわゆる先進諸国にはほぼ共通する問題としてあると言っていていいと思いますし、ここには触れませんでしたけれども、もう一つつけ加えるとすれば、モラトリアム期間の長期化。ですから、今、若者の体感的な成人年齢というのは30歳と言っていていいと思います。成人式というのは自治体がやってくれる同窓会みたいなものでありまして、ほとんど通過儀礼としての意味はなくなってしまっています。30歳を過ぎるころから「そろそろヤバイ」と言い始める若者が大変多い。これは体感的な成人年齢として、30歳が有効になっていることを意味するでしょう。

実は、30歳成人説というのは20年前から言われていることでありまして、現場での感覚で言いますと、もう少し上ではないか。例えば35歳ぐらいではないかという感じがしないでもないところがありまして、今の40代ぐらいから成熟の実感というのがだんだん希薄化しているという感じは、最近非常に強く感じるところでもあります。

これはある意味、必然でありまして、成熟の課題といえますのは、何かを創出していくということも当然あるんですけれども、成熟として要求されるさまざまなスキルがあるわけですが、私の仮説といえますのは、社会の成熟度と個人の成熟度は反比例するというものでありまして、社会がシステムとして成熟していきますと、個人の成熟はだんだん必要とされなくなってくるという傾向は、ある程度言えると思います。

つまり、個人の機能として要求されるさまざまなスキルをアウトソーシングできてしまう。社会システムが代行してくれるので、個人がすべての機能を持っている必要はない。まさに解離的な適応力があれば、あらゆる機能を個人に集約する必要はなくなってしまうわけでありまして、そこから出てくるのは、例えば、自明とされるような成熟した人間に要求されるいろいろな機能、最もその疑問にさらされているのは恐らく就労という問題だと思います。就労の自明性というのが非常に希薄になっている。

最近、内閣府の資料としたいいただいたアンケート調査の結果でも、「就労するのは義務である」という問いに対して「そう思わない」という回答が30%以上を占める。本当は、私はもっと高いと思うんです。「こういう質問には、とりあえず義務と答えておこうか」という若者も結構いたはず

ですから、その自明性はかなり疑問にさらされていると言っていいと思います。つまり、なぜ就労しなければならぬのか、あるいは就労しなければどうなってしまうのかということに対する想像力が著しく低下してしまっているんだと思うわけです。

考えてみれば、なぜ就労しなければならぬのかという疑問に関しては、確かに明解な答えはないわけです。それは、なぜ人を殺してはいけないのかということに対する論理的で厳密な説明がなされ得ないのと同じような意味で、なぜ就労しなければならぬのか説明しようとするすと、無限後退か論理的循環か、あるいは正当化の恣意的打ち切りか、この3つのどれかのパターンに陥ってしまうということでありまして、決定的な証明はできない。いわゆる「ミュンヒハウゼンのトリレンマ」です。ただ何となくそういうことになっているというふうな、慣例といいますか、習慣といいますか、そういったものが伝わってきているにすぎないということが何となく体感的に共有されてきているということがあると思います。

引きこもりとニートの増加に関して言えば、もちろんフリーターも含めてですけれども、そういった就労することの、あるいは成熟することの自明性が崩壊しつつあることが示されていると思いますし、この自明性の崩壊という点に関して言えば、これも日本に限らず、先進諸国にいずれも共通する問題ではないかと考えております。

今、大体話してしまいましたけれども、成熟のおくれの問題というのは、そういったように、自明とされた価値判断の混乱であるとか、モラトリアム期間の増大であるとか、ある種この社会システムがそれを用意してしまった部分も大分大きいのではないかとことがあって、さらに言えば、それが本当に悪いことかどうかとも問い直しておくべきではないかと考えるわけです。

いろいろな価値判断が、そういう疑問にさらされてきますけれども、ただ、人間というのは全く何の拠り所もなしには生きていけないわけでありまして、特に先ほど示しましたような自分探し系の若者にとっては、自己のイメージを仮託する何かが必要であるということで、今、最ももてはやされているのは心理学化、心理主義化の風潮でありますね。つまり「トラウマ」といったような特殊な言葉がこれほど人口に膾炙した時代というのは、かつてないわけですし、ほかに PTSD であるとか、あるいは最近で言えば適応障害であるとか、そういった言葉がこれほど社会をシンボライズするものとして流布すること自体、なかなか希有なことではないかと思うわけです。

もちろん、解離の問題ということもありますし、リストカットの問題。このリストカットというのも、旧来であれば「リストカット・シンドローム」みたいな病名がつくほどのレベルの問題であるんですけども、今やもうかなりの比率で、統計調査はないのですが、診療場面にあらわれない若者、特に女性はかなりの比率でそれを経験していることが知られ始めていますので、そういった問題が極めてカジュアルに起こってきていると言えると思います。いろいろな局面で、この心理主

義化、心理学化が進行していることが、先ほどの若者の変容に1つあずかっている部分があるのではないか。

もう一つは、コミュニケーション格差の問題。これが非常に大きいと私は考えるわけですね。若者の二極分化傾向はいろいろなところで指摘されておりまして、最近では、苅谷剛彦さんの「インセンティブ・ディバイド」ゆとり教育批判として出てきた言葉ですけども、そういった問題であるとか、これに類似したものとしては、最近、山田昌弘さんが出された「希望格差社会」といった概念があります。つまり、ある種の初期条件をたまたま持ってしまくと、そこからどんどん格差が開いていく方向にしか関係性が進んでいかないという問題とっていいのではないかと思います。

この問題は、先ほど示しましたような引きこもり系と自分探し系の二極分化にも該当するところがあって、今やこの格差は中学生ぐらいから起こり始めてきているという実感があります。つまり、中学生ぐらいで、嫌な言葉ですけども、勝ち組と負け組が分かれてしまう。勝ち組というのは本来の意味通り「勝ったと思込んでいる人」という意味ですけどね。(笑)

そういった意味で、コミュニケーションが苦手と思込んでいる人は、自分を負け組に分類してしまう傾向があるんですね。そして早々と「自分はこちら側の人間で、日の当たる側には一生行けない」というふうな思込みがなぜか生まれて、固定化してしまう傾向が最近強まっているような印象があります。ここで二極分化の萌芽があるわけですけども、これがそのまま延長されていきますと、先ほど申しましたように、コミュニケーション格差の病理として析出してくる場合もある。

これを増大したのは、明らかにメディアの介在でありまして、今は本当にさまざまな、コミュニケーションスキルを伸ばすような、携帯、ネット ネットに限ってもメール、チャット、メッセージ、ブログ、SNS といろいろあるわけですけども、そういった回路がさまざまに整備されて、コミュニケーションな若者にとっては、そういったツールで幾らでも人間関係を拡大できるという状況がある。その内容が、言われるとおり薄く広がっているのかどうかは、私はわかりませんが、確かに人間関係の数量的な増大は、明らかにあるとっていいと思います。それがもたらす新たな匿名性の問題、つまりネット心中であるとか出会い系殺人であるとか、そういった新たな問題が生じてきているのも事実とっていいと思います。

ただ、これは先ほど宮台先生がおっしゃいましたように、流動性というものを受け入れていくとしたら、ある程度払わなければならない一種の犠牲みたいなものでありまして、こういったものを抑えながらよい流動性だけを高めていくことは多分難しい、ほとんど不可能ではないかと思うわけです。

私も医者ですので、処方箋を出さなければいけないところなんですけれども、なかなか有効なものはいつかないところがあります。冒頭で申しましたように、不適應はどの時代でも、どの社会

でも起こる。ですから問題は、その不適応がある種の構造が要請する必然以上の事態にまで波及・拡散してしまわないような受け皿なり何なりを用意しておくこと。

引きこもり問題で言うならば、引きこもりの若者が出てくるのはしょうがない、ただ、それが追い詰められた結果としての心中未遂、つまり両親の殺害であるとか、そういった悲劇にまで至ってしまう回路は、何としても塞いでおきたいというところがあるわけですから、そのための具体的な対策としては、実際問題として、この引きこもり概念の啓蒙であるとか、居場所であるとか、フリースペースであるとか、そういったものの整備ということが言えると思いますけれども、もっと大きな枠組みで考えた場合には、先ほどの自明性の崩壊というものに関して、我々はある程度それを認めていかなければならないと考えるわけです。

例えば、引きこもりが生ずる構図の大きな原因としては、もはや無効であるにもかかわらず「就労が義務である」と考えている人がまだたくさんいるということですね。この問題は非常に大きいと思います。つまり、世間体というものはそういうところから生まれてくるわけですから、就労が義務であることをそろそろ忘れて、就労は趣味にすぎないということをもう少し許容してもいいのではないかと考えるわけです。就労も引きこもりも選択肢の1つとしては等価であるといったような、ちょっと過激な意見かもしれませんが、ある程度そういったカウンターを持ち込むことによって、世間的なところから来る無駄なプレッシャーみたいなものをもう少し削ぎ落としていくことができれば、引きこもりの問題というのはさほどこじれずに済む部分があるのではないかと考えるわけですね。

ここでヒントになるのは男女比の問題です。なぜ引きこもりは男性に多いのかといいますと、学校を卒業した後の社会参加へのプレッシャーは、明らかに男性の方が高いからです。世間から来るプレッシャーは、明らかに男性の方が高い。なぜなら、女性に関して言えば、今のところ家事手伝いであるとか専業主婦であるとか、引きこもりと全く同じ生活をしていても、それをカムフラージュできるような（笑） すみません、気を悪くした方がいらしたら申しわけないんですけども

名前が存在する。この名前があるだけでプレッシャーが随分軽くなっているわけです。これによって、一たん引きこもってしまった女性にも新たな流動性が与えられるという回路が存在するわけで、そういった次のチャンスをもたらすためにも、そういった意味での流動性を高めるためにも、就労とかそういったさまざまな、諸々の価値観の自明性みたいなものをもう少し疑うところから出発することもあっていいのではないかと思います。

いささかまとまりがありませんでしたが、私の発表は以上です。（拍手）

モデレータ ありがとうございます。

引き続きまして、パネリストの方から冒頭のご発言をいただきたいと思います。

初めに、小杉さんからお願いいたします。

小杉礼子（独立行政法人労働政策研究・研修機構副統括研究員）[資料参照]

私の方からは、10分ぐらいお時間をいただいて、私の立場から見た現在の若者像という話を、今、お話がいろいろ出ましたフリーターとニートというあたりを中心に話ししたいと思います。

最初に、このグラフでお見せしたいのは、私は、学校から職業人として一人前になるプロセスが、今、大きく崩れていると見ています。学校から職業への移行というプロセスが大きく崩れていて、その過程でいろいろなトラブルが生じているんだろうと。

これは学校基本調査という、学校の出口で悉皆でとっている調査なんですけれども、そこで、正社員に就職という形ではなく学校を卒業していく若者の比率を見たものです。これは同世代のコーホートといいますか、ある同年代の人たちが、さまざまな段階で学校を離れているわけですが、それを全体として見たものです。

96年に中学校を卒業した世代、2002年に大学卒業ぐらいの年ですか、その人たちの状況からいくと、大体今、同じ世代の中の4割近くは、もう正社員として就職するような形で学校を離れていないということですね。学校を離れる段階で、今まで普通だと思われていた就職というプロセスではなくなっている。それがこの十数年の間、大きく変化しているという事態が明らかだと思います。

この学校から職業への移行、これまでは80%以上、90%近くの人たちが、学校から職業にすんなり、学校卒業と同時に入っていた。それが大きく崩れて、今、そういうプロセスに乗る人は6割ぐらい。残りの4割は違う形で学校から離れていっているという事態です。

そういう事態の背景にあるのは、まず第1に、就業の方の問題が大きくて、卒業時点で就職口が少ない。その1つが、これは年齢別の失業率なんですけれども、若い人は非常に失業しやすい。今、20代前半以下、10代後半から20代前半までの失業率が特に高い状態になっています。失業率というのは、ただ仕事がないだけではなくて、仕事を探して就職活動をしていて、それでも仕事が見つからない人たちです。この背景には、産業界の側がこういう人たちに対する求人をどんどん減らしているという事態があると思います。

それと同時に起こっているのが、アルバイトやパートという形態で働く若者たちの増大です。アルバイトやパート、それから、最近ではそれ以外の名称で働く人も増えておりまして、正社員以外の形態が非常にふえている。

もう一つ同じようにふえているのが、先ほどから出ているニートと言われている人たちなんです。今、統計でニートをとるために、こういう表現で統計をいじってとっています。非労働力人口なのですが、労働力というのは、仕事をしている人と、先ほどの失業に出ていました、仕事を探して仕事に就けないでいる人。そうではない人たち、仕事を探していない人たちの中で、多くの場合、

仕事を探していないのは、学校に通っているとか専業主婦で家事をしている人なんですけれども、そのどちらでもない人という形でとったのが、これです。一応、今、労働政策の中で、大体30代前半ぐらいまでを若者という形でターゲットにしているので、ここでは15歳から34歳としていますが、特に何か定義というよりは、実態として把握するための操作的なものとして、30代前半までをターゲットにして数をとっている状態です。

ここで、今述べたところ、まさに男性と女性の比で、男性が多くて女性が少ないんですけども、ただ、これは「主に家事をしている」と答えた人を除いているからこうなので、実は、これに「主に家事をしているけれども専業主婦ではない人」というのを加えると、男性とほとんど同じような数字になります。「主に家事をしているけれども専業主婦ではない」というのはどういうことかという、家族の中の子供役割ですね。家族の中に子供としているけれども、本人は「家事」と答えている。いわゆる「家事手伝い」という表現になると思いますが、その人たちを加えると、男女の比は余り変わらなくなります。この統計、この段階ではそこまではかれなかったんですが、そういう状況です。

今のニート状態の人たちを1歳刻みの年齢で見たのがこれなんですけど、これで見ると、特にふえているのが19歳と23歳という2つの山が見えてきます。多分これは、最初に見た学校から職業への入り口が大きく変わっていることを典型的に表しているんだろう。つまり、学校卒業1年目の人たちが、そういう就職活動も何もしていない状態に陥っている比率が突然高まっているわけで、いわゆる就職口がどんどん少なくなったという社会変化の結果として、学校を卒業してしばらくの間、就職先を探さない状態の人たちがふえているんだろうと思います。

学校から職業への移行のプロセスが、今、大きく変わっていて、かつてのイメージだと、学校卒業と同時にほとんどの人が就職で正社員になるというプログラムが社会にあった。実はその中があったのは、本人のキャリアとか能力の形成とか、そういうものが、正社員として企業の中にいることにビルトインされていたのが日本の社会で、むしろ職業に就いてから本人の能力を形成する場が与えられたり、あるいは本人としてのアイデンティティ、職業人、社会人あるいは会社人間としてのアイデンティティが得られるのが、正社員として職場に入ってからというように、ある意味ではシステムとしてうまくでき上がっていて、その中で若者たちを社会の構成員として育てていく、そのプログラムが多く企業社会の中にビルトインされていたというのがこれまでのイメージだったと思います。

それが今、学校から正社員になる口がかなり小さくなっている。その過程で失業する若者たちがふえていますし、フリーターといいますが、アルバイトで一時的な仕事をする若者たちがふえている。そして仕事を探すこと、アルバイトで仕事することもしていない若者もふえている、こうい

う状態だろうと思います。

この社会の問題は、やはり能力、キャリア形成という本人が育つプロセスが、これまで企業社会の中、正社員にしかなかったという状態だろうと思います。フリーターから正社員に変わるようなプロセスが用意されるとか、あるいはニート状態からまずフリーターになる、あるいは失業者が正社員になっていくという、企業社会にビルトインされたそのものにアクセスできない人を吸収していくような仕組みが社会的にあればいいわけですし、あるいは、一たんフリーターとなった人たちがそのまま、正社員以外の雇用形態の中で能力やキャリアを形成していける、本人にとっての将来が見える形になればいいという、社会の仕組みの方を操作すれば、それなりに若者たちにとって自分の方向、能力形成とかキャリアといったものの方向が見えてくる社会が作り得るのではないかというのが私の主張したいことの基本です。

こういう若者たちの現状を、私は、今の統計的な変化と同時にインタビュー調査からも見ています。その話は時間があればさせていただきますが、今の中で特に就業が困難なのは誰かということ、フリーター率で言うと、やはり学歴が低い人と年齢が若い人。失業の方でも、実は学歴が低い、年齢が若いというのは最も失業しやすいそうなんです。これは、やはり背景に産業界が求めている人材が学歴の高い人であり、10代の若い人ではない、そういうところに焦点がいつている、その結果としてフリーターとか失業という状態になります。

もう一つ、ニートの問題では、学歴的に言うと中学卒業学歴者が思いのほか多いんですね。この「中学卒業」には高校中退者が非常に含まれていまして、学校から職業への移行のプロセスの中で、特に学校中退者に対する対応を、今までの日本社会はほとんど持っていなかった。それがここに、今、ニートの統計をとると出てくるということで、実は、この人たちそのものは前からいた層であります。今、ニートという問題がクローズアップされる中で改めてこれから対応しなければならないのは、学校中退層だと思えます。

もう一つ、失業の統計をより詳しくすると、24歳以下の大卒者には、実は非常に失業者が多いんですね、少し上になると大卒は失業しなくなるんですけども。これは、やはり大学卒業したての数年間の話で、いわゆる自分探しといった傾向の問題が、特に高学歴者にあらわれているのではないかと思います。

移行が困難な若者の背景ということで、いろいろな分析をしてきたんですが、その中で、労働市場の問題と学校の問題というのは、もうある程度知られているところだと思います。それに加えて、やはり社会関係の問題とか家庭背景の問題とか、こういう部分がこれから分析していかなければならないところではないかと思ひまして、そういう点、既にお二人の先生から話されたような若者自体の持つ社会関係の問題、あるいは家庭の問題が、現在の失業・フリーター・無業の背景にあるの

ではないかといった思いで、私どもはずっと労働市場と学校の分析だけをやってきましたんですが、最近ではインタビュー調査を通じて、そうした面からの切り込みを少し始めている段階です。

そこで、1つだけ言っておきたいことは、背景にかなり違いのある人たちが、同じようにフリーターやニートに入っている。特に象徴的には、学歴関係でかなり整理されるんですが、高校中退とか高校卒業レベルでニート、フリーターになるタイプと、大学卒業あるいは高等教育中退でニート、フリーターになるタイプではかなり大きな違いがあって、それは、基本的には家庭背景の違いなんですけれども、ある程度、高等教育に行くような家庭背景のある人たちにとってのニート・フリーター問題というのは、自分探し問題である。それに対して高校中退あるいは高卒でニート、フリーターになる人たちは社会的な背景の方が非常に大きくて、むしろ学校、高等教育に進めない家庭を背景に、その家庭にある労働への文化というものを背景に、その中で、働きへと押すそのものが伝播しないような家庭環境を背景に起こっているのではないかと、そういった整理をしているところです。

移行困難な若者、こういった今の若者像に対してどういうふうにアプローチするかというところなんですけれども、私どもの立場としては、ニート・フリーター問題を問題にしているのはなぜかという、これは社会の構成員がどんどん欠けていく状態だと想定してしまっていて、それに対して社会として、社会を支える側の構成員をつくっていくのは、ある意味で社会として必要なことではないか。この社会の、ある意味では種の保存だと思っているんですけれども、そのために、やはり社会は政策を発動して彼らを私たちの社会のメンバーにうまく組み込んで、社会をつくる側の人間に、つまり働く側の人間にしていくことが社会の存続のためには必要だということから、政策を考えているところです。

そこで、政策展開としては、少なくとも違う背景を持った人たちに対して、違う展開をこれから考えていかなければならないと思っております。

時間になりましたので、これで終わります。（拍手）

モデレータ ありがとうございました。

それでは、小倉さんから。

小倉千加子（評論家） 私は政策提言をする立場にいる人間ではありませんので、ただ事実と私の考え方だけをお話ししたいと思います。

まず、ニート、フリーターの問題なんですけれども、私はずっと結婚現象について研究してきましたので、このニート、フリーター、あるいは引きこもりの若者たちと結婚問題について、少しだけお話ししようと思います。

「政策提言する立場にない」とわざわざ強調したのは、要するに、何が問題であるかを定めるこ

と、それ自体が問題であると私は思っているからです。例えば「晩婚化」という言葉がありますけれども、これは「今は結婚していないけれども、やがて結婚するだろう」結婚年齢の高齢化、結婚を前提としているから晩婚化という言葉が出てくるのであって、ひょっとすると、今、未婚の男女は一生未婚のまま、要するに「非婚」という人生を送るかもしれないにもかかわらず、これを「晩婚化」という言葉に置き換えて、「彼らはいずれ結婚する」と決めつけてしまっているという危険性があります。

今、結婚していない人たちがふえています。未婚者の増大ですね。特にこれは都市圏、東京で顕著なことなんですけれども、高学歴で高収入の男女が結婚していません。これに対して、今までお話にありましたような引きこもりやニート、フリーターの人が将来、結婚できないのではないかという、その「できない」という言い方ですね。私もこういう言葉は使いたくないんですけれども、いわゆる勝ち組の男女が結婚していなくて、そして負け組の男女が結婚しているという事実が実際には存在するわけです。

もちろん、文字どおり引きこもっていれば結婚することはないとは思いますが、ニートやフリーターの結婚率は、私は、非常に高いと思っています。特に地方では。彼らは生活費が十分ではありませんので、年金とか保険料といったものは祖父母が払っているというようなケースも多々あります。

要するに、人は何もすることがなくなったときに結婚する生き物であって、例えば、内紛状態にある国に難民キャンプみたいな所がありますけれども、ああいう所ではどんどん子供が産まれてくるわけですね。食料がない状態なのに子供が産まれる。これはなぜかということ、難民キャンプにおきましては、女性を妊娠させることしか男性の男性らしさを証明する手段がないからであると私は考えておりますから、男性から男性らしさを証明する他の手段を奪ってしまえば、男性は結婚していく。言いかえますと、ほかに何もなるものがないとき、男性は父親になる。

そうやって、結果的に「出産階級」という階級が生まれつつあるわけですね。出産以外に社会への貢献の仕方がない人たちを出産階級と呼ぶわけですが、そういう人たちは、社会・経済的には負け組なんですけれども、「負け組」とは、私に言わせれば、本当は負けているのに負けているとわかっていない人たちのことです。ですから、この社会の勝ち負けというのは、経済的なものを指標にして一元的に決まるものではありません。主観的な物差しを加えますと、勝ち組の方が負け犬率が高く、負け組の方が勝ち犬率が高いという非常にねじれた構造になっているわけです。

話を今の若者に戻しますと、先ほど宮台さんが、他者不在でも欠落感を感じない若者がふえているとおっしゃいましたが、今の大学生を見ておきますと、全くそのとおりだと痛感しています。具体的に言いますと、恋人と一緒にいるとそれなりに楽しいんだけど、家に帰って1人に

なるとほっとすると言う学生が実に多いわけですね。では、2人いるときと1人いるときとどっちが楽しいのかという質問は、ナンセンスなんです。楽しさの質が違うので、比べられないと。

結婚するとしても、あくまで自分は自分の個室で寝たい、ベッドは別にして寝たい、あるいは結婚しても同居したくないとかですね。夫婦だから同居しなければならないという同居の義務というのが法律的には決められているらしいんですけども、それを希望しない若者が非常にふえています。別居婚とか週末婚とかですね。あるいは、中年夫婦で「家庭内別居」という表現がありますけれども、若い人は、もう新婚のときから家庭内別居あるいは別床　ベッドが別。

これは、先ほどの宮台さんの言葉を再び借りるならば、パートナーの人格の解離化に人は耐えなければならない時代にもう入っているわけですね。かつては結婚相手、特に男性の側は、外で働いてきて家に帰ってくる、外の顔と家の顔が別、2つの顔を持つと言われていましたけれども、女性も働き始めると外の顔と家の顔と2つ持つわけですから、合計で4つの顔が誕生するわけです。しかも、先ほど言いましたように、家の中ですら夫婦で個室化が進行しているわけですから、そうなりますと、家の中でも2人いるときと1人切りのときと、それから、家にどちらかの親が来るとか、あるいは子供が産まれるとかしかメンバーが3人にふえますと、1の世界、2の世界、3の世界と人は世界を3つ持つわけで、その都度、人格が変わる。自分も変わるしパートナーの人格も変わる。その変わる相手の人格にこちら側がどこまで耐えられるか、これが非常に難しいわけですね。

特に1の世界にいるパートナーとはコミュニケーションが存在しないわけですから、相手は趣味に没頭しているといった状態になりますから。そうなりますと、結婚そのものにどういう意味があるのかと多くの高学歴、高収入の男女、つまり、自由な時間を非常に大事にする人たちは考え始めているわけです。

それから、先ほど「代替性」という言葉が出てきましたけれども、今、職場ではどんどん労働内容がマニュアル化しているといいますが、極めて単純な労働内容にしておかないと、いつ人がやめるかわからない。すぐに人が採用できて、即戦力とするためには、代替性の高い労働内容にしておかなければ非常に危険であると経営者は考えるわけです。ところが、皮肉なことに、代替性の非常に高いような仕事に就かされる労働者の方は「こんな誰にでもできるような仕事には働き甲斐を見出すことができない」といって、早期に離職してしまうわけですね。悪循環が生じてしまうわけです。

こうなりますと労働から、代替性の高いような、誰にでもできるような仕事を一生やっていくなんて考えられないということで、労働から撤退するという意味で結婚願望が存在するのは事実なんです。つまり、代替性の高い職業に就いている人ほど結婚願望が強いということなんですね。

言ってみれば結婚は自分の居場所探しということになるわけです。仕事をやめて、本当に自分で

しか得られない場所が欲しいということになるわけですが、その前に結婚相手を探さなければいけないわけで、皮肉なことに、結婚もまた市場化されておりまして、結婚機能のアウトソーシング化が進んでいる状態です。別に妻でなければできないことはないわけですが。1人の人間がすべてのことを1人で引き受けてくれる、それを求める方が間違っているのもあって、お金さえあれば、何人かの人にその機能ごとに自分の便益を図ってもらうような時代に私たちは生きているので、結婚願望が強いのに、結婚を維持することが困難、あるいは結婚そのものが困難な時代になってきている。

もう一つ、アメニティ、快適さですね。これを追求することに関しましては、若者たちは小さいときから消費者として十二分に成熟しております。物を買うということは、イコール何百とある種類の中から1つを選ぶということなんですね。したがって、結婚ほど、あるいは結婚と子育てほどアメニティのないものは世の中にないんです。したがって、消費者として成熟すればするほど結婚相手を商品として選ぶ目も肥えてしまうし、そして結婚生活の中に入りますと、そのアメニティが余りにも低いから、なぜこれを続けなければならないのかということ、すぐに離婚してしまうということが現実に起こっているわけです。

言ってみれば、結婚という長期契約を結ぶことのメリットがどんどん失われていくと同時に、心理学的な次元では、結婚という長期契約を結ぶような自信が自分にはないという若者がふえています。単純に言いますと、同じ人を何十年にもわたって恋愛対象とし続ける自信がないということですね。過去を振り返ってみても、長くて2年半ぐらいしか続かなかった、短いときは3カ月だった。「なのにどうして、この1人の人と30年から50年も添い遂げることができるだろう、とても自分には無理だ」みたいな、恋愛に関して成熟している人ほど結婚をためらう、そういうパラドックスが生じてきています。

政策提言をする立場にないと言い切ることは非常に楽なことでありまして、言いたいことだけ言っていればいいんですが、結婚というものの自明性も、今も崩壊しつつあることは言っておきたいと思います。就労の自明性が崩壊しているということは、社会的には、年金制度とかいろいろあって問題かもしれませんが、結婚の自明性が崩壊することに関しましては、私は、年金制度云々から言うと、それほど大きな行政課題ではないと思うんですね。つまり、これを問題化の方が問題ではないかと思っています。

もはや1人の人間がもう一人の人間の自我のケアを、あるいは経済的な扶助・扶養を賄わなければならない筋合いはない。恋愛感情が冷めてしまった後まで、愛してもいない人間をどうして養わなければならないのかと多くの中老年男性は内心思っておられるのではないかと思うわけですが、あとはもう、妻が介護保険的なものと思込まなければやっていられない、それだけのことではないかと思うわけですね。（笑）

今や結婚機能のアウトソーシングといえますと、女性が男性に求めるものとしては経済力が一番メインに来ているんですけれども、経済力と恋愛相手というのは、もう完全に切り離されつつある状態です。恋愛というのはドキドキするものなんですが、ドキドキするというのは、先ほど言ったように、それなりに楽しいんですけれども、やはり1人になってまったりもしたいし、癒されもしたいわけですから、恋人とは別にカウンセラーみたいな人も必要になってくるわけですね。ですから、お金を運んでくれる人と、ドキドキを運んでくれる人と、心のケアをしてくれる人と、1人の人間が何人もの人間を所有していないと生き抜いていけない。こんな時に結婚して1人の人に縛りつけられていたら恋愛の自由がないということを恐れる。非常に恋愛能力が高い人の方がそう思うわけです。

私の本音を言いますと、ニート、フリーターの人たちの結婚というのは、その結婚に先立って、ドキドキするような恋愛感情は存在していないと思います。恋愛と結婚制度を結びつけてしまった近代というものが、そもそも矛盾をはらんでいると思うので、そのツケが回ってきてしまったかなと。結婚制度というものはほかの制度でも何でもそうですけれども、完成した途端に崩壊が始まるわけで、今やもうそういう状態が始まっている。

特に東アジアの問題として、先ほど儒教の影響ということを斎藤さんがおっしゃいましたけれども、今や韓国、台湾、シンガポール、日本、こういう東アジアの国が少子化の突出した国々になっておりまして、ある意味、文化的に東アジアは共通文化圏になってきている。そして少子化とか、あるいは結婚とか、あるいは引きこもりとか、こういう問題を抱え込んでいるということになるわけですが、こういう所で、どうやったら若者に夢を持たせることができるか沢山の大人が集まって考えられるぐらい日本は豊かな国なんだなと私は思いました。

ニートと少子化を結びつけるようなフォーラムに私が今日、出席するんだと言いましたら、ある社会人学生に「ニートと少子化の二兎を追うフォーラムなんですか」と言われまして、そうかもしれない。「文化が爛熟すると人は生産も再生産もしなくなるので、これはもう手の打ちようがありませんよ。ただし、人口が減ったって国が減ぶことまで考える必要はありませんよ」と言っていましたね。中世にペストが蔓延して、人口の3分の1が死んでしまったような国がありますけれども、それで国が減んだとは聞いたことがありませんので、私は、少子化対策として結婚奨励策を国がとること自体には、何の効果もないと思っています。

ニートやフリーター、あるいは引きこもりに対して何かしなければならぬのかなということに対しても、私は少し警戒心を持っています。

フリーターのある男性が書いた本の中にありましたよね。自分は家において、自分のものは自分で洗濯しているんだけど、「主婦業」が許されるんだったら「子供業」をずっとやっていくこと

が許されてもいいのではないかと。妙に説得力があるなと思いました。

それから、引きこもりには圧倒的に男性が多いとおっしゃいましたが、私は、結婚して専業主婦になりたいという女性も実は引きこもり傾向が非常に強くて、専業主婦になって、それから外にほとんど出たくないというか、出るのが怖いという人たちは、「引きこもり主婦」と呼ばれないで「アゴラフォビア」と呼ばれているだけなのではないかと思えます。命名が違うだけで、実は本質は同じなのではないかと思えます。それはジェンダーの視点から一言言わせていただきました。

私の意見は以上です。（拍手）

モデレータ どうもありがとうございました。

それでは宮崎さん、お願いいたします。

宮崎哲弥（評論家）

私はショートコメントしか出しません。皆さん立派な研究者、学者でいらっしゃるの、一方的にお話をお伺いして、今日のお話をどうやって政策的にまとめようかと考えるわけですが、今、小倉さんがおっしゃったようなことは、ここにおいでになっている方にはなかなかピンと来ないかもしれません。宮台さんは学生さんとお付き合いになっているのでよくわかりだと思いますけれども、例えば女の子は、全く恋愛機会がない人と恋愛機会に恵まれている人と分かれてきている、二極化が進んできているので、恋愛機会が豊富な人たちは1人の相手と長期間にわたって付き合う傾向が非常に低くなってきていて、小倉さんがおっしゃったよりさらに機能分化の傾向が進んでいる。何人もの相手を恋愛の対象にして、それも機能ごとに分けている。セックスフレンド、つまり性的な結合だけを求める人、あるいは心の安らぎを求める人、というふうに分けている。しかも、相手もそのことを承認している、そういう傾向が徐々に高まっています。いずれ結婚というものが、崩壊するかどうか、根底を完全に失ってしまうかは別としても、様変わりしていくことは間違いないと思います。と同時に、就労の自明性、結婚の自明性がなくなってきたということが、今日、一連の話として出てきたわけですが、これは職業生活と結婚生活では結婚生活の方が強いということではあり得なくて、実のところ、結婚生活の崩壊と職業生活の崩壊はほぼ同時に起こっていると考えべきだと思います。両方が同じ形で自明性を奪われている。

というのは、私が副主査を務めております日本21世紀ビジョン生活・地域ワーキング・グループの中に山田昌弘さんという方がいらっしゃいまして、先ほど斎藤さんも触れられましたが、「希望格差社会」という本をお出しになっています。この本で述べられていることとお話しますと、要するに、かつて高度経済成長期に日本人が持っていたような一つのライフコースのひな型、見通しのある人生航路というものが成立しなくなっているということです。いい学校に入って、いい企業に入って、いい家庭を持って、いい老後を過ごす、ハッピーリタイアメントまでいく、そういう、あ

る意味で単線的な見通しやすいライフコースが想定できなくなってしまったために、希望が失われてしまった。自分の将来設計を明確な形で描くことができないので、むしろ「今、ここ」つまり刹那的であったり退却的であったりするようなライフスタイルが出てきた。引きこもりやニートというような、一種ある視点から見ると病理的に見えるような極端なケースだけでなく、普通に働いている人の中にもそういう意識ができてきたということが述べられています。

だから、普通に職業生活の中に入っている人たちの中でも、いつそういう退却的な、刹那的なライフスタイルに入ってしまうかもわからない。それは一番最初に宮台さんがおっしゃった、乖離という問題ともかさなってくる部分があると思うんですね。そういう意味では、ある意味で現在の成熟した社会、社会システムあるいは非常に高度化した資本主義に対応するような人格、適応人格というものになってきている。それが旧来の労働や生産や結婚といったものを壊しているということです。それに対応する形で、私たちがちゃんと政策を打ち立てて施策を講じられているかということ、どうも私はそういう感じはしない。

1つには、私は、この問題の入り口は教育問題であって、出口は恐らく年金を初めとする社会保障の問題だろうと思っているんですが、どうも入り口も出口もちゃんとした形で、問題意識はおありになるんですけども、ちゃんと改革が進む形にはなっていない。例えば、教育の問題に少しだけ触れておきたいんですけども、昨今、日本の学力低下がメディアでよく言われます。学力低下、諸外国に比べて数学、読解能力、その他の能力が落ちてきている。これは大変な問題であって、ゆとり教育けしからん、日本の文教政策の間違いがこれではっきりしたというふうにあらゆるメディア 朝日新聞から産経新聞まで書いているわけですけども、私は、これに疑問を持っています。

というのは、そもそも学力低下を憂う人たちは一体何を憂っているのかよくわからない。それから、学力が仮に向上したとしましょう。今、かつてのような詰め込み型の教育を復活したとして、一時的に学力が向上したとする。その先にあるのは何なのかということです。今このフォーラムで皆さんのお話を聞いてもお感じになったとおり、例えば学校に行かない、あるいは高学歴を持っていても結婚しない、あるいは職業に就かない人たちが出てきているのは、果たしてゆとり教育のせいでしょうか。学力低下を招くような文教政策を行ったからでしょうか。私はそうは思いません。むしろ、村上龍の「希望の国のエクソダス」という小説があります。これは1999年ごろに書かれた小説ですけども、この小説では中学生が集団で不登校をやるんです。なぜかということ、この国に夢がないから。この国にはすべてのものが揃っている、インフラも整っているし社会福祉も充実している、しかしながら夢だけがない。そういう問題意識を持った主導的な立場の中学生が、このような社会から退却してしまおうということを提唱しまして、中学生が集団で不登校を行うという話なんですけれども、この中に印象的な言葉が1つあります。今の教育制度というのは夢以外にはす

べてのものがなかったときにつくられたものである。私は、そのとおりだと思います。しかし、そんな教育制度を今になっても続けている社会というのはおかしい、私もそう思います。すべてのものがなくて夢だけがあった社会と、すべてのものがあって夢だけがない社会。全く様変わりしているはずなわけですね。

では、今あるべき教育制度というのは何なのかということを考えてみれば、私は、大変評判の悪いゆとり教育の中に1つのヒントがある。いわゆる、これも大変評判の悪い言葉ですけれども、「生きる力」というものです。生きる力なんていうものを文教政策で植えつけようなんていうのは幻想だと。

その批判も私はよくわかるのですが、考えてみれば、今のフリーターの問題にしてもニートの問題にしても、根底は、ここの部分が壊れているから。学力低下だって同じなわけです。学ぶ力の根底には生きる力があるわけです。学ぶ力は生きる力に包摂されるはずですから、学力が低下している原因は、その生きる力の部分が壊れているからなわけです。「希望がなくなっている」という言い方もできるし「夢がなくなっている」という言い方もできるし、「欲望が少なくなっている」という言い方もできる。私は、どれも同じことだと思うし、この成熟した資本主義社会にニートというのは同じ意味を持っている。だから、この部分をもし補うことができるのだったら、どういう形で補てんしていくかという問題意識が、ゆとり教育の考え方の根底にあったわけですけれども、それが今、単なる学力問題に縮退され、短絡されている。それがけしからん、これから日本の産業社会はどうなっていくかという問題に短絡されているわけですね。

同じ生活・地域ワーキング・グループの副主査をやっている玄田有史さん、ニートという言葉が流行らせた人ですけれども、この人が、職業を持った大人に出会う機会が非常に減っている、そこが一番の問題なのではないかと。つまり、かつてライフコースが確定していたときには、今やっている勉強は学校とつながって、会社とつながって、ある種の自己実現としてつながっていく。その手段と目的の関係が非常に間延びしたものであったとしても、その部分を社会が補てんしていたわけです。ところが今の子どもたちは、目的、手段の次にすぐ目的が欲しい、結果が欲しい、何かがやったら結果が見えるという形でないとなんとも納得しなくなっている。その部分を、短絡と言えは短絡なのかもしれませんが、その部分をどういうふうに、職業生活のおもしろさということ、カンファタブルというか、即時的な楽しさみたいなものにつなげていくかということをやりにながら、「職業生活というのはこんなものなんだよ」と教えていかなければならない。そういうものを総合学習の時間ということではなすべきだったのではないかと私は思っています。

そこで、玄田さんが提案されているのは、一般の会社の人たちに14歳 中学2年生を1週間だけ受け入れて、職業生活を経験させるということです。これは一部の都道府県でやっています、

玄田さんが「アステイオン」という雑誌に書かれていますけれども、非常に子供たちの態度が変わった、顔つきが変わってきたと。これは微々たる変化のように見えるかもしれませんが、私もそう思いますし玄田氏もそう書かれていますけれども、大きな変化だと。今までとは全く違った世界、彼らの閉鎖的になりがちで自己完結的な価値世界と違うものに触れる機会を14歳ぐらいで与えるということは、とても大切なことなのではないかと思います。

どうしても政策論に結びつけてしまいますけれども、そういう試みが、ゆとり教育と言われる一つの大きな概念転換の中で行われている、そういう可能性があるものを、単なる学力問題に縮退させてこの芽を摘むというのは、まさに現状を認識していない人たちの愚かな行為だと思います。

もう一点だけ、これは本当に短く済みますけれども、確かに結婚というものに政府が政策的に関与するなんて愚の骨頂であるということは小倉さんと同意見なんですけれども、あり得るとすれば、やはり年金問題なんですね。年金を個人化していくことが必要なわけです。世帯単位でつくられている年金その他の社会保障を個人化する。どんなに転職しようが、離婚を何度も繰り返そうが、最低限の社会保障は個人のものとして持っていられるという形に変えていく必要があるということですね。

先ほど申し上げましたとおり、この問題の入り口は教育問題、出口は年金・社会保障問題であるというのは、そういうような政策的な意味を含んでいるということです。

以上でございます。（拍手）

モデレータ どうもありがとうございました。

さまざまな意見が出されましたけれども、それでは、初めに宮台先生、今の各パネリストのコメントを踏まえまして、言い足りなかった点等ございましたら。

宮台 最終的に私が申し上げたかったことは、ある価値観を選んだら、あるネガティブイティ否定性は歩留まりとして引き受けていただきたいということなんですね。そのネガティブイティ否定性がどうしても回復されなければならない重要な問題だとお考えになるんだったら、グランドデザインそのものについて別な価値観をとっていただきたいということです。温いことを言ってほしくないんですよ。一方で大規模店舗規制法緩和で社会の流動性をどんどん上げておいて、子供たちには寛容であれとか学力低下を憂うとか、もう笑ってしまってどうにもならないわけですよ。

例えば、ゆとり教育OK。私はゆとり教育の旗降りしていましたが、玄田さんよりもはるかに以前から企業内での中学生の体験学習をずっと推奨してきて、そういう意味で、例えば学校へのゲストティーチャーの導入やら、わかりやすく言えば、教員免除を持たなくても教壇に立てるような方向での文部省の政策変化のバックボーンを提供してきたわけです。

例えばゆとり教育というのは、今、宮崎さんがおっしゃったのはこういうことですね。詰め込ん

で高能力化しても受け皿がなく、その結果アノミー化してしまう可能性があるんだったら、ここから先は私のよく使う言葉ですが、競争し、早々と諦め、勝った人間をリスペクトする、そういう行為態度を習得してもらえないんですよ。これは簡単に言えば、ゆとり教育化とエリート教育化を両立させる道であり、その意味で言えば、格差を拡大するというか、容認する道なんですよ。一方で、勝った人間は選別され、選別された人間に対する動機づけが提供され、さらに競争してもらい、選別する。選別と動機づけの繰り返しによってスクリーニングをしていくという動きを一方で徹底的にやりながら、負けた人間には、もう一度言いますが、競争し、諦めてリスペクトしてもらい、こういう方向に行ってもらえない。

諦めてリスペクトするためには、自分自身が社会の中で占め得るポジションについての明確な意識がなければいけない。そこで、キーワードは「住み分け化」ですね。みんな同じような場所をとれるわけではない。自分には自分の場所がある。この住み分けが可能であるためにはということで、私が過去10年近く申し上げてきたモデル学習化。モデル学習という意味は、職業教育が重要であるということよりも、社会の中でどういう人間がどういうふうにいる以上、自分がそのようなポジションにつける、つけないといったようなことはさして重要ではない。あるいは、親が何と云っていろいろマスコミがどう騒いでいろいろ、自分はこのポジションさえあれば生きていけると思えるようになるモデル学習化、これが住み分け化にとっての決定的に重要なことなんですよ。

ということで、処方箋について、もし比較的高い流動性ととも歩留まりを上げるというか、つまり、削りかすが出てくる率をできるだけ下げようとするならば、今、申し上げたようなゆとり教育化によるある種の格差の拡大と、それを社会的に容認させるような方向での処方箋というか、政策ですよ。ゆとり教育化とエリート教育化を両立させるという意味でのゆとり教育化と、住み分け化を促進する意味でのモデル学習化、これを組み合わせることによって、競争し、諦めてリスペクトしてもらおうという行為態度を社会に広く流布させるしかないわけにあります。

もし、そうではなくて社会的流動性そのものを、例えば経済的な国際競争力が下がろうが、これを低下させることによって自分自身が入れかえ可能だという感覚を減らしていく、これが重要だと考えるのであれば、ある種の欧州主義、あるいはその先達であるアジア主義的なオルタナティブな近代を構想していただくしかない。すなわち、わかりやすく言えば、レリーズ的なアメニティは、もちろんこれを敵視する必要はないが、これが社会を覆い尽くすことについては断固反対をする。

以上です。

モデレータ ありがとうございます。

引き続きまして、斎藤先生。

齋藤 私は精神科医でもありますので、基本的に、価値判断を提示したり政策にどうこうするという立場と距離を置くべき存在ではないかと思うわけですが、こういう場ですから、それに近いことも多少は言うかもしれません。

先ほどいろいろなところで自明性の崩壊であるとか、特に結婚と就労、確かにこれは宮崎さんおっしゃったように、結婚と就労の問題はほとんど密接にリンクした問題でありますから、両方の自明性が同時に損なわれるというのは当然だと私も思います。

そういったものが崩壊しつつあるとは言っても、まだ完全に崩壊したわけではない。それは、例えば社会学の領域などで、「家族」というのは事実上、定義不可能なものということで、もう家族もどんどん流動性が高まって崩壊していくみたいなことがずっと言われ続けてはいるわけですが、実質的には、家族というのはまだまだ根強い制度として自発的に維持されているところがあると思うんですね。それは結婚と全く同じだと言っていいと思いますけれども、結婚に関して、先ほど小倉さんが言われましたように、無意味さであるとか不自由さであるとか、そういったものがかなり露呈しつつある。一般論としては露呈しつつある。「でも自分だけは違う」ほとんどの人々がそう思っているがために、まだ維持されているところがあると思います。

そういう価値判断抜きでは、やはり生活とか社会というのは維持されていかないところがあるわけありますから、どうせであれば、そういう有益な価値判断があってしかるべきと私も思うんですけども、ただ、すごくそれが一元化した形で社会全体を覆うということは、私も宮台さん同様、そういうことは望ましくないと思うわけです。

では、価値判断をどうやってもたらずかということを考えてときに、私は、最終的な拠所は、やはり依然として家族しかないだろうと思います。家族が有効性を維持するとしたら、それは個人の価値判断の原器として、器として、最終的な拠所としては、もう家族しかないだろうというのが私の判断でありまして、恐らく教育以前の段階で形成されるもの。

ですから、ハードな体験をすると若造は変わるだろうという非常に安直な考え方がありますが、これは、旧世代独特の悪しき体験主義化みたいなもので、これはもうとっくに反証されているのです。

なぜかといいますと、韓国で引きこもりがなぜふえているか。あそこはすべての青年に2年間の兵役が義務づけられているということを考えていただきたい。兵役後に彼らは引きこもってしまうんです。これは立てこもりみたいになってしまうらしいですけどもね、そういう感じの非常にハードな引きこもりになってしまうわけですよ。全く体験が機能していないわけです。つまり、兵役に参加して相当鍛えられます。私も会った経験から言いますと、実際、向こうの青年は日本の若者に比べて、一見したところ爽やかだったり、凛々しかったり、そういう若者がどんどん引きこもって、

家で「廃人」化してネットゲームばかりやっているという現実が一方であることを、まずしっかりと考えていただきたい。要するに、体験で変わらないものが相当たくさんあるということも、現実としてあるわけですね。

だから、要するに、教育で与えられるものというのは確実にあるんです。私もどちらかといえばゆとり教育派と言っていいのではないかと思うんですけども、ただ、体験主義の限界みたいなものを考えたときに、やはり遡って有効性を確保するとしたら、そこはやはり家族しかないのではないかと。家族の有効性、これは私が、臨床家としてはどちらかといえば精神分析により多く依拠するところがあって、いまだにエディプスコンプレックスみたいなものを頑迷に信望しているところがあるせい　つまり父と母と子という三角関係ですね、そこで価値判断がはぐくまれるという基本的な設定を、まだ私は維持していますので、それを効率よく与えることができるとなると、やはり家族しかないだろうと考えるわけです。

これは別に父と母の役割分担を固定化するという発想ではありません。母のような父がいてもいいわけですし、父のような母がいてもいいわけで、それは何ら問題がない。ただ、価値判断をはぐくむときに、父的なものと母的なものがある、そこで葛藤が生じたり学習が生じたりするということは、恐らく今後もそう簡単には変わっていかない。その器としての家族を有効なものとして、価値判断の器としてどういうふう維持していくか、それを考えたときに、そこで何か政策的なことが言えればいいのかもかもしれませんけれども、そこまで私も思いつきませんので、とりあえず、家族がポイントではないかということだけ述べさせていただこうと思います。

モデレータ　どうもありがとうございました。

それでは、間もなく12時を回りますので、ここで会場からご意見あるいはご質問等ありましたら受け付けます。それらを踏まえて各パネリストの先生から最後の締めということで、全体をまとめていきたいと思います。

どうぞ、せっかくの機会ですので、ご質問、ご意見等ありましたら。

質問者　ユーモアの中にも大変鋭い指摘、ありがとうございました。貴重なお話、まことにありがとうございました。

斎藤先生、宮崎先生、宮台先生にお尋ねしたいんですが、価値判断というか、日本の教育の非常に欠けている点について、霊的な意味での宗教をどのようにとらえておられますでしょうか。

モデレータ　ありがとうございました。そのほかに。

質問者　本日は貴重な講演をどうもありがとうございました。

今日は、引きこもりとかニートについて、まず受けとめて、容認してあげて、ただし、そういう残酷な事件が起きないように社会的に認知してあげる方がいいのではないかという意見にすごく感

銘を受けまして、「あ、そういう考え方もあるんだな」と思いました。

ただ、このニートの問題で常々心配に思っているのは、彼らが生活できているのは、結局、親がいるからであって、親がその生活を維持しているからではないかということです。つまり、この子供業というのはいつまでもはできなくて、親が亡くなった後とか、定年になって収入が減った後では、子供だけにいることはできないのではないかと思います。そういったときに、彼らが将来どういう生活をしていくのか、この21世紀ビジョンシリーズのテーマであると思うんですけども、2030年頃、彼らの生活がどうなっているのか。

年金などを彼らが、多分、親が払っていると思うんですけども、そういう収入だけで生活していくのかとか、生活保護をもらうのかとか、そうなったときに、やはり社会全体に負担がかかるわけなので、そういうことについて、引きこもりを容認した後の世界をどういうふうにお考えになっているのかお聞きしたいと思います。

以上です。

モデレータ ありがとうございます。そのほかには。

質問者 もう一点よろしいですか。

引きこもり等が起こす非生産的な人口比率ということにおいて、いわゆる労働生産的ではない公的機関の人の比率をどのようにとらえているか、やはり同じくお三方に。

モデレータ では、宮崎さんから。

宮崎 最初の、スピリチュアリティ 霊性としての宗教という問題とどういう関連性があるか、あるいはそこに何か突破口や解決の糸口があるかということ。一応私、宗教思想が専門ですので、お答えしたいと思います。

確かに、山田昌弘氏の「希望格差社会」の中でも、宗教について触れられている部分があります。そもそも人間の歴史を振り返ってみても、希望が溢れている時代というのは客観的に見ればなかったわけです。人類史の大半は貧困と飢餓と戦乱にまみれていたわけで、本当に希望が持てるような客観状況ではなかった。しかしながら、人々は希望を持ってきたわけですね。今のように物が溢れていて、福祉もそれなりに充実していて安心が担保されているような状況ではなかったにもかかわらず、人々は希望を持っていた。

これは山田さんは、多くの宗教は来世観を持っていて、つまり死んだ後に生まれ変わるということですね。そこにおける希望というものが、キリスト教も、ある種の仏教もヒンドゥー教もイスラム教も、来世というものは持っているわけですから、そこにおける救済が希望というものを備給していたというような考え方だと思います。

そういう意味で、希望というものを考える上で宗教の役割があるのではないかとお考えになる方

もいらっしゃるかもしれませんが、今、パネリストの皆さんがおっしゃったとおり、かなり分散化、拡散化が広がっていきますので、単純に現世の中に来世という概念を外挿するような形で希望を備給するというのは、現代社会においてはかなり難しくなっているのではないかという気がいたします。

私はブディストですので、先ほど宮台さんがフーコー的なものからドゥルーズ的なものへの社会像の変容ということをおっしゃっていましたが、これを社会哲学の分野に移行して考えると、ロールズ的なものからパーフィット的なものへの変化と考えられると思うんですね。ロールズというのは、1つの既定的な人格性みたいなものを肯定して、それは堅いものとしてあって、その中で平等で自由な社会、つまり個人というものが確実にあるということを前提にして、平等で自由な社会を構想していくわけですが、デレク・パーフィットという社会哲学者、政治哲学者は、まさにその堅い人格性みたいなもの、社会の基礎としてロールズやコミュニタリアンたちが想定したような人格性というのは否定するわけです。まさに乖離的、あるいは同一性のないものこそが人間の人格のあり方であると。

同一性なき人格のあり方ということ为基础にして、政治的な政策や組織というものをこれから考えていかなければならない、制度を考えていかなければならないというような定義をして、これは「理由と人格」という大著を森村進さんが訳されていますけれども、そういうロールズ的なものからパーフィット的なものへの変化を肯定的に考えるとすると、パーフィットが最終的に注目しているのは、実は仏教なんです。仏教は無我論を根底にしています。あるいは諸行無常、すべてが流転するという考え方を基礎に立っている。あるいは縁起という考え方で、要するに、関係論なのですが、ある種の乖離性みたいなものに対する回答になっている部分もある。そういう意味で、私は仏教というものは可能性があるのではないかと考えていますけれども、恐らくクリスチャンの方は違う処方箋を書かれるのではないかと。

そういう意味では、非社会性、脱社会性に向かうとするならば、その先に宗教的なものがある。我々が考えている組織的な宗教ではないですけれども、そういうものがある可能性は、私は否定できないのではないかと考えています。

宮台 僕は数理と文化と思想史が専門で、思想史的に宗教の問題を言うと、過去2,500年の思想は、不安ベースの世界観と内発性ベースの世界観の対立です。詳しい話は、最近出た仲正昌樹さんの本をごらんいただきたいんですけども、最近で言えば 最近というのは100年前ですけども、ニーチェがなぜキリスト教をこてんぱんに言ったのかということ、ニーチェ的にはキリスト教はだめな宗教なんですね。なぜ徹底してだめな宗教かということ、不安ベースの宗教だからですね。あししないと、こうしないと神の罰が下る、あるいは天国の狭き門に入れない。であるがゆえに、皆

さん先を争って救われようとして、目的合理的に機能されようとする。

このニーチェの発想は、ニーチェはもともと古代ギリストの文献学者ですから、ペレポネソス戦争に負ける前のアテナイの社会のあり方を参照しているわけですね。ペリクレスという鉄人がいたころのアテナイを参照しているわけです。

マックスウェーバーが言ったように、古代ユダヤ教、つまりまだミッシェは登場していないというユダヤ教も、不安ベース。この予言者、つまり神の言葉を預かった者は絶えず天罰の可能性を人々に示唆して、怯えさせる宗教ですね。そしてキリスト教は、基本的にはその直径の子孫、分岐していますが、不安ベースです。

イスラム教だけがちょっと違うんですけども、これはお話する機会がありません。大川周明ではありませんが、イスラム教的なものが世界的に広がると、不安ベースのおたおたした人間たちの振る舞いがなくなるのではないかと思います。

つまり、宗教があれば人はおたおたせず真っ直ぐに生きられるといった我々の思い込みは単純に過ぎて、宗教なるものをほとんどわかっていないんですね。

アメリカを見ましましょうか。メリーランド大学が9・11以降に調査したデータによると、アメリカでは宗教がなくては世界がうまくいかないと考える人間が8割を超えています。ヨーロッパではどの国も大体2割前後です。アメリカがいかに狂った国であるかがよくわかるわけですが、アメリカは、もともと流動性の高い不安ベースの国です。不安ベースであるがゆえに、神にすがざるを得ないんですね。そこで強い信仰を持つがゆえに不安にたえられる、がゆえに社会はどんどん流動的になる、こういう循環構造を持っている社会です。

アメリカは、いつまでもそれをやっていけばいいのですが、ヨーロッパのジュニンケン闘争やらウェストファリア条約で、そういう不安ベースのローマ教皇の、あるいは宗教者の煽動にいかにか防波堤をつくるのかということが、社会思想の、あるいは社会構築の課題であったと意識している人間たちは、アメリカは、簡単に言えば宗教、あるいは政教分離の本義を理解しない田舎者の集まりだというのがヨーロッパ的な見解で、私も、アメリカを常々そういうふうに思っております。しかし、そのアメリカを真似して、マニュアルロル的なもの、何かというとエビデンスを要求するアメリカ的な作法を国内中に広げ、入れ換え可能なものを押し広げていく、こういうやり方に単に思考停止で追従する、この日本の将来は、もう推して知るべしということでございます。

親のストック資産がなくなってしまうと、すねかじり家や子供業家もうまくいなくなるだろう。それはそうかもしれませんが、見田宗介さんが「現代社会の理論」でおっしゃっているとおり、そのストック資産の減少を補って余りある情報化、少子化、すなわち低コストでエンジョイアぶるな何者かを享受できるような、韓国で言えばネットゲーム的なものがいかに広がるかに

よって、アムミー化するかどうか。言いかえると、ネットゲーム的な低コストでエンjoyイアブルなものが頭にプラグインされていれば、最低限飯と水さえあれば人はOKという社会も構想可能で
ございます。

非生産労働としての役人の比率。これは「非生産労働」というもの、直接的に生産に従事していないということではありますけれども、要は、私の問題意識で言えば、いわゆるエリート教育がどれだけ進んでいるかによります。今日はエリート教育の話がないのでとても残念というか、時間がないので詳しく申し上げることができませんが、私にとっては、先ほど申し上げたとおり、ゆとり教育化とはエリート教育化と表裏一体のもので、このエリート教育なるものは、中国のエリート教育や昔のギリシャのエリート教育を参照するわけですが、「日本にも偉い人がいた」とか「日本にも立派な時代があった」とか言わないと勇気が出ず、前に進めないような者はどんどん切り捨てる。むしろ日本がいかにだめな国であったのかということ徹底して教えて、そこで「だったらアメリカに行こう」という者も切り捨てる。それは行けばいい。それでもなおのこと、「このだめな日本を救う、おれこそが日本の中興の祖だ」と感じる人間を育てる、これがエリート教育の本義ですね。

いかに自分たちの共同体がだめであることを徹底して教えることによって、ちゃんとバックラッシュするかどうか。そこでバックラッシュしないんだったら、もうこの国は終わりということではないでしょうか。

以上です。

モデレータ それでは、斎藤先生が急用のため中座されますので、斎藤先生から。

斎藤 何も言うことがなくなってしまったような感じですがけれども、質問についてちょっと触れておきたいと思います。

ニートや引きこもりを容認すると社会がどうなるかみたいなご議論がありましたけれども、容認する、しないという議論ではないと私は考えています。つまり、容認しなければどうかという話なんです。容認しない、ハードな議論を彼らに突きつけたからといって、彼らが何かしら動機づけられるかという、それはないわけですね。むしろそういう議論には全く有効性がない。容認するのは、要するに彼らをコミュニケーションの回路に誘惑するための技術であって、容認することがコミュニケーションとして有効だということがあるわけですが、そういう有効性の問題なんです。だんだんそういう有効性の方にシフトしていくわけで、倫理観とかそういう話とちょっと違う話になってしまっていることをご理解いただきたいと思います。

ただ、私の予想では、もちろんニート、引きこもり、恐らくもうしばらくすると頭打ちになってくる。しばらく増加が続いて、だんだんと増加率が減少していく。なぜかという、我々世代以降の親はみんな身勝手になっていきますので、ニート、引きこもりの子供を養っていくほどの家族主

義が失われているわけですね、どんどんと。(笑) そういった意味では、どんどんおっぼり出すようになってくる。それでヤングホームレスがふえるのかどうなのかはまだわかりませんが、ニート、引きこもりを抱え込むだけの寛容性は失われていく可能性が高いということで、だんだん頭打ちになっていくでしょう。

それで、今あるニート、引きこもりはどうなるかという、これはもう今、既にそういう現状がありますけれども、つまり、50歳、60歳になった元ニート、元引きこもりの我が子を80歳、90歳になったお母さんが自分の年金だけで養っていくといった状況が起こってくる。ニート、引きこもりの人たちというのは大変我慢強いので、耐乏生活に長く耐えられるという特性を持っておりますので、それが可能なんですね。そうなったときに、果たして我々は彼らを責めるべきかどうかということも今から考えておいて、私はいいのではないかと思うわけです。

先ほど生産性をめぐる議論が出されました。生産性、それから労働の美しさ、魅力というのは、要するに、労働の価値とか労働の美しさ、働く人の美しさなんていうのは突き詰めていくおかしなものになっていく。そういう部分があるんだということを考えていただきたい。生産性があった方が本当にいいのかとか、働く人の美しさというのは自明のものなのかということは、私は、1度は疑う柔軟性があった方がいいと思います。それを疑った上、でも私もそうですけれども、でも、やっぱり働いた方がいいだろう。そういう懐疑を経た後の価値判断を与える器として家族に機能してもらいたいというのが、やや腰砕けの結論なのですが。

今日は私、そろそろ出なければいけないものですから、この辺で終わらせていただきたいと思います。(拍手)

モデレータ ありがとうございます。

それでは、まとめということで、小杉さんお願いできますでしょうか。

小杉 ニートと引きこもり、あるいはフリーターの話を中心にさせていただきましたけれども、私は、容認するというよりは、ある意味では、それらは誰でもなり得る存在であって、それはつまり社会の仕組みの中から、あるいは社会の変容の中から、何かの形でつまりけば誰でもニートになる、そういう構図を持った社会なのではないかと思っています。そういう意味での容認といいますが、存在の背景を分析することが大事だと。

その上で、私は、それを放置するという事ではない。ここでやはり社会的な政策発動が必要になってくるんだと思います。それは学校の中でという問題も 家庭に対する政策というのはなかなか動きませんから、政策的な対応としては学校教育というところになって、先ほど宮崎さんがおっしゃったような、学校教育の中での職場体験等々を含めて、社会的な体験を開いていく、その中で個人の、「生きる力」という表現になっていきますけれども、自分の将来を自分で考えていけるよ

うな力を養うという学校教育のあり方の変容が1つ必要でしょうし、それによって避けられるニート化というのがもちろんあると思います。

あるいは、今の労働市場の状況の中で当然出てくる失業であり、フリーターであり、ニートでありという状態。市場状況の方の問題としては、ある意味では学校卒業一時点にかなりプレッシャーのかかる今の就職、学校から社会への移行の仕組みですね。18歳なり22歳なり、ある一定の時期にうまくプレイしなければ、安定的な就業とか将来性のあるチャンスをつかめない、こういう社会の状況の方を変化させていくことが、もう一つ対応としてあると思います。

途中からも参入できるようなプログラムですね。特定の一定時期にこれだけプレッシャーがかかっているということが、一方で自分探しの旅に出なければならない人たちを生み出したり、あるいは早い段階でチャンスが見えなくなるとやはり低学歴でニート化する人たちには将来に対する希望、ある意味でまさに希望格差の状態、将来の自分が全く見えないために非常に刹那的になっている人たちが生まれておまして、そういう人たちに対する対応というの、一時点でうまく移行しなければ成功できないという社会でなくすることによって可能だと。

そういう意味で、今、ニート、フリーターを論じるのは、彼らの存在をそのまま受け入れるためにということではなくて、そのプロセスを吟味していくところに、今、私たちの社会の置かれている状況が見えてくる、社会の問題が見えてくるということであって、そこを変えていくのがまさに政策だろうと思います。

21世紀のこのフォーラムで考えるべきことは、やはりその政策的な対応を会議の方では考えているわけで、そこが今、提案していくべきポイントではないかと思っています。

モデレータ ありがとうございます。

それでは、小倉先生。

小倉 別に私に対しては質問もありませんでしたので、話すこともないと思うんですが、先ほど齋藤さんがおっしゃった家族の機能、家族の必要性に関して言いますと、私は家族の機能が、何と云いますか、必要以上に存在しているがゆえに、引きこもりは引きこもれているわけではないですが、今。引きこもりの母を私は周りに何人も知っていますけれども、ちゃんと御飯をつくって部屋の前に置くんですね。そんなの「つくるのやめればいいのに」とか思うのですが、非常に内省的なお母さんの1人が言っていましたね。引きこもらせているには自分にも原因がある。つまり、自分の中のどこかに子供が独立して家を出ていくことを恐れる気持ちがあるんだと。いつまでもこの家の中にいて、結婚しないで、私の子供でいてみたい、それを正直に私に言ったことがあります。

つまり、彼女は母親である以外に生きる場所を持たないんですね。そして、過剰にその母親性を引き受けたがゆえに引きこもりの息子をつくってしまう、こういうこともあるので、私は、まず引

きこもりのお母さんが働きに行って、もう御飯つくるのをやめればいいと思うんですよ。

同じことを、あるテレビで、子供のくせに理屈ばかり言ってる討論番組があり、思わずテレビに怒鳴りたくなることがある。「おまえは誰のおかげで飯食ってられるんだ、親が働いているからだろう。人前で「人間は何のために生きるんだ」とか「何で人を殺してはいけないのか」とか、そんな考える必要もないことを考えるために親は汗水たらして働いているのではないんだから、そういうのは自分が働いて税金を払ってからテレビに出してもらって、人前で言うに足ることだけを言え」と。(拍手)子供を甘やかし過ぎていますよ、日本は。

なのに、さらに子供に夢を与えるということまで考えていますから、日本人の大人はまじめ過ぎるんですよ。子孝行、これが行き過ぎています。

だから、ある一定の年代の人は、親孝行だし、自分の親の介護もしているし、そして引きこもりの子供の御飯もつくっているし、ある一定の世代の人は、働く人は死ぬまで働き続けて、その子は死ぬまで働かないんですよ。だから、親と子の労働量を足すとみんな一定量になるのではないかと私は……

だから、やはり日本はそういう意味で甘えの文化……、だから東アジア的な、儒教的な強制力を裏返しにして親子の癒着が起こっているのだから、儒教は宗教ではありませんから、そういう意味で、宗教的な立場から儒教を考え直すよいきっかけになるかもしれないですよ。

そういうようなことで、よろしいでしょうか。

モデレータ それでは、宮崎さん。

宮崎 皆さんのお考えを伺って、なるほどなと思うところ、示唆される場所も多かったんですけども、いずれにしても、今日、出てきたことで考えなければいけないのは、なかなか目に見えない形である、特に為政者や、霞が関や永田町にいてああいう擬似現実の中にいるとわからなくなっているんですけども、大きな変化が起こっている。

何度も名前が出ている山田昌弘さんが「1998年問題」という形で指摘しています。いろいろな指標にあらわれている変化というのは、単に経済問題だけではなくて、社会全般、あるいは人間の意識自体、価値意識自体にまで変化が全般に及んでいる。そのことをきちんと認識した上で、旧来のさまざまな自明性が壊れていくことを認識した上で、経済政策なり社会政策なり、あるいは司法政策なりを考えていかなければならないんだけど、どうもその部分が、いろいろなバイアスがかかったり、ジャーナリズムがおかしかったりすることによってなかなか浸透していかない。その中で、今のこのシステムに対するただ乗り、フリーライドとか、あるいは今のシステムを悪用したり、あるいはそこに過剰に依存したりするような状況でシステム自体がどんどんぶっ壊れていく、一方的に壊れていく、そういう状況にあると思います。

だから、宮台さんがエリート教育の話をされましたけれども、責任のある人たちというのは、選良、エリートなわけですから、全般を見渡してきちんとした形で対策を打っていく、施策を打っていくということをもっともっと厳しく認識しなければならないのではないかと今日のフォーラムを通じて感じました。

モデレータ ありがとうございます。

それでは宮台さん、何かございますでしょうか。

宮台 山田昌弘さんの議論、「希望格差社会」と同時にもう一つ出した……

宮崎 「パラサイト社会」。

宮台 はい、「パラサイト社会」ですね。あれは、いわゆる霞が関的な通念に対する批判から始まっているんですね。つまり、少子・高齢化の理由は女性の社会進出に対する阻害である、女性の社会進出を認めると少子・高齢化に歯どめがかかるという、これは嘘である……

宮崎 それは赤川学さん。

宮台 ……あ、これは赤川さんの本ですね。そういう話があります。これはある意味、全くそのとおりですね。統計的にはっきりしているのは、皆さんもうおわかりのとおり、シングルマザーを初めとする産婦たちに対してどういう扶助を行うか。

さっきの儒教文化圏というのは、簡単に言うと、儒教的な枠組の外側で行動する人間に対して冷たい社会ですので、当然のことながら非婚化いたします。そして非婚化による少子・高齢化、これは結婚したとしても少子・高齢化するんですが、これは不可避でございますね。家族の枠組で行動する者だけが行政の支援を得ることができるような、そういう提案をしている戯けた政治家たちが多いようですが、そういう方々は少子・高齢化に対するいかなる歯止めを行うことも不可能であるということを申し上げて、私の話とします。

以上です。

モデレータ どうもありがとうございました。

E S R I の経済政策フォーラムということで、従来はどちらかというと、いわゆる経済そのものを扱ってまいりましたけれども、今回は「現代社会の若者像」ということで、もちろん経済的なメカニズムもありますが、社会面に少し研究所としても重点を当て、さまざまなテーマ、なかなか1人の個人、若者、代表的個人という、そういうもので律せないところがあります。

本日はまことに多様な観点からさまざまなご意見が出て、有意義だったと思います。

本日は年末のお忙しいところをご参集いただきまして、ありがとうございました。パネリスト、講師の先生方、ありがとうございました。どうぞ拍手をお願いします。（拍手）